

要約

「世界の瞬間——チェーホフの詩学と進化論」

高田 映介

本論文の中心的対象は、19世紀ロシアを代表する作家のひとり、アントン・チェーホフ(1868–1904)である。チェーホフはロシアおよび欧米における小説史上に革新的な一歩を画し、のちの時代の不条理劇にも通じるような新しい形式の劇作も多く残した。彼の文学の大きな特徴は、作家自身が表明していた「作家は問題を解決せず、提示するのみ」という文学的客観性である。この客観性は「無思想、無傾向」、または現実に対する虚無的態度として同時代には批判された。20世紀に入ると、問題の解決を差し控え呈示に徹する作品の客観性は、文学とは社会に対してメッセージを発するものだというロシア的伝統にあって斬新なものに見なされ、以下のようなチェーホフの詩学の大概念がこれまでに提出されてきた。

- ・人間の生の複雑さと対応するような物語の「偶然性」(Чудаков А. П. Поэтика Чехова. М., 1971)
- ・人物の「覚醒」を描く「認識論的主題」(Катаев В. Б. Проза Чехова: проблемы интерпретации. М., 1979)
- ・チェーホフ以前のロシア文学に特徴的な社会階級性を超越する「アンチヒエラルキー」(Сухих И. Н. Проблемы поэтики Чехова. СПб., 1987)。近年は既存ジャンルのパロディをチェーホフの基本手法と見る流れを引き継いで初期のユーモア短編に注目が集まり、文体に対する関心が優勢となっている(Тюна В. И. Художественность чеховского рассказа. М., 1989. : Овчарская О. В. Ранняя А. П. Чехова в контексте малой прессы в 1880-х годов: Автореф, дис...канд. филол. наук. СПб., 2016.)。

作品を一読すれば、チェーホフの文学的客観性は直観的に正当性を持つように見えるし、了解可能である。しかしだからこそ、従来の研究では客観性の実態、およびそれを可能とするテキストの実際的構造が明らかにされてこなかった。その結果として、上で挙げたようなチェーホフの詩学についての大概念はそれぞれが独立したものに留まっており、作品の個別的な様式分析に向かう傾向にある近年の研究も諸概念と有機的に結びつくことなく、彼の詩学は未だ統一的に描き出されていない。

文学的客観性を前提として享受するのではなく、テキスト構造のうちに客観性を保証する仕掛けを具体的に分析することによって上述の問題は解決する。こうした問題意識から、本論は「観察者チャーホフ」の客観性の意義を改めて描き直すことを目的とし、そのために従来になかった分析の視座として科学、とりわけダーウィンの進化論に着目した。

科学はわれわれの思考の枠組みや世界像と無縁のものではあり得ない。そもそも近代科学の勃興期において、世界の成り立ちを探る試みの根底にあるのは聖書の「創世記」であった。それも「創世記」からの脱却が目指されたのではなく、むしろ反対に、聖書に書かれた事柄こそが自然界の起源の真の説明であることを証明しようとするのが十六、十七世紀における科学の努力だったのである。だからといって本論文は、科学的知見を短絡的に文学分析に持ちこんだり、チャーホフの創作の全部をそれでもって説明づけようとしたりするものではない。注目すべきは、人間的な主観を捨てたところに科学と文学の客観が成り立つとチャーホフが考えていた点にある。ダーウィンの進化論が傑出したかたちで十九世紀の世界に衝撃を与えたわけは、純粹に自然科学的プロセスである自然淘汰によって生命の多様性を説明するその学問的方法が文化の中に持ちこまれた時に、選ばれしものとしての特権的立場から人間を追いやり、自然から慈悲深さを奪い、神の意志も何らの目標も計画も存在しない荒涼とした世界を人々に想像させたからに他ならない。つまり、ダーウィンの進化論は人間の主観的思考からかけ離れた地点に成立する。一方で、その根本に組み込まれている非目的論的性質が人間の一般的な合目的思考との間にずれを生ぜしめずにはいないために、理論は人間的感情を刺激してやむことがない、そこにダーウィニズムの大きな特徴が存しているのである。チャーホフとダーウィニズムの関連について、伝記的レベルでの指摘はこれまでもあった。しかしながら、進化論のこうした本性を取り上げ、それをアナログ的なロジックとして用いる視点からチャーホフの詩学の相貌を統一的に描きだすような分析は、未だ試みられたことがない。

以上の方針に基づいて、本論は序論と五つの章、ならびに結語から構成される。まず序論では、チャーホフが終始一貫して示した「文学的客観性」という態度は科学の客観性と接続されていたことを、チャーホフ自身の書簡の言葉から明らかにした上で、二つの類似は何よりも、人間の主観的感覚から遠ざかる地点に確立されることを指摘する。その上で、各章の考察となる対象を決定し、研究の全体図を示す。

第一章では、主として最初期の作品を対象に、同時代、あるいは先駆ける時代の作家とチェーホフの影響関係を考察する。まず、思想・文学上の指導的理念を失った八〇年代の時代的性格を、文学作品から哲学論、社会評論に至るまで掲載された文芸誌から、大衆的な新聞・雑誌へと主力が移って行く、メディアの変遷の観点から論じる。新聞やユーモア雑誌の書き手だった八〇年代作家たちに向けられた否定的評価を手掛かりに、簡潔な状況呈示や、滑稽さや偶然性に左右される筋、偉大ではない主人公像といった創作上の特徴は、しばしば言われるようにチェーホフにのみ特有なものではなく、新聞やユーモア雑誌が外的に規定する条件ゆえに、これら「小さな刊行物」の書き手に共通したものだことが明らかにされる。

急速に進んだメディアの大衆化と視覚化は、一八四〇―五〇年代にロシアで流行し、未熟なロシア社会にナショナリズムを作り出す手段と見なされた「生理学的スケッチ」を、即物的ジャンルとして八〇年代に回帰させる。だが、「生理学的スケッチ」のそもそもの起こりであるフランスの「生理学もの」の時からその根底にあった、科学的権威の下に文学はすべてを解明し、描き切ることができるという思惑はいつも共通していた。対してチェーホフは上空飛行的で万能なものとして科学を思い描くことはしなかったことが、観相学的記述を拒否した『青髭ラウルの手紙』などから示される。そのことは、文学には世界の全てを開陳する力はないという彼の確信と呼応していることを指摘する。

第二章では、科学の客観性とチェーホフの世界像の類縁性についてさらに詳しく論じる。まず、ダーウィンの進化論は、非人間中心主義的で非目的論的なものとして生命の由来を語る点に、それ以前の進化論との決定的な相違があることを明らかにする。その上で、『種の起源』着想の一因となったマルサスの人口論とも関連するかたちで、ロシアにおけるダーウィン受容の流れを追う。科学の領域においてはわずかな例外を除き受容の実態は発展的進化観に基づく「非ダーウィン」的なものに終始したこと、文学界においてはトルストイが理論の核心に迫ったが、歴史の原理は確実に在るが不可知であるというトルストイの思考と、歴史を偶発的なものとして記述するダーウィニズムとの態度の違いの点で、彼が進化論を棄却したことを明らかにする。そして、ダーウィンの『種の起源』および『人間の由来』と着想や構成の点で似通う面の多い、チェーホフの学術論文構想「性の権威史」の分析を通じて、そこには自然淘汰のプロセスに対する正当な理解と非人間中心主義的思考とが見られることを明らかにし、チェーホフは上に述べたような進化論の本質を積極的に認めていたことを指摘する。

上二つの章を下地として、第三章以下では、具体的にチェーホフの詩学の分析に取り組む。チェーホフの作品の特に初期に目立つパロディ性や、作中で変化する人物像、時にナンセンスに感じられるまでの、作中の諸要素の因果関係を欠く断片性、そして結末の未完成性など、従来指摘されてきた彼の詩学の大概念を可能にしているものは、テキストのどのような実地的構造であるのかがつねに関心の中心となる。

第三章では、チェーホフの人物像がさまざまなレベルで生理学的スケッチの社会風俗的タイプとしての一面、ないし時とともにそれが無力化した紋切型としての一面を有していたことを、『小役人の死』など初期の諸短編から考察したのち、結末における主人公の道徳的更生が批判を呼んだ『決闘』を素材として、チェーホフの人物は自ら「型」を演じ、それに同化していると同時に、「型」から逸脱していく部分があることを、対照的な二人の人物が作中で似通う過程に注目して論じる。彼らが作品の末尾で互いに似るところから、「型」に当てはまりきらない変化としての「個」が立ち現れてくるのだが、生物の個体的限界性にも似て、そのような個性は結局展望なく閉じていくものであることが明らかにされる。

人物像の変化は作品の独立した部分ではあり得ず、物語の筋の展開の一部、あるいはそのものなのだから、それが限界的であり、未完成に終わることは、いわゆるチェーホフの「開かれた結末」の問題と通じる。そこで第四章では、物語の構造と語りの特徴の点から再びこのことを捉える。特に『イオーヌィチ』において、若き青年医師が肥満した守銭奴に変わる過程が着実に進むにも関わらず、語りの上では因果関係を欠くことを根拠に、チェーホフの物語世界にあって人物像の変化は、進化の歴史がそうであるように、前もって知ったり、予定されていたりするものではなく、他でもあり得たようなものとして生じることを指摘する。これによって、大団円も、問題の解決も見られないようチェーホフの物語の断片性、未完結性がつくられるのは、出来事がしかるべく積み重なりひとつの結果に至るようなストーリーの累積的進行が見られる一方で、そのようなストーリーの全貌を語り尽くさないかたちでプロットが語られるという、物語の構造的特徴のためであることが指摘される。

第五章では、人物がこのように行き止まり、彼の変化が明確な結果を結ばないことと絡めて、チェーホフ時間と空間の特徴を論じる。人物が今居る場所とは異なる理想的な別の時空間へ行きたがるという、チェーホフに特徴的な「逃避」のモチーフが、厳密な空間上の移動としてではなく、彼らの言語や時間感覚を通じて生じるものであることを、『百姓たち』『新しい別荘』『谷間』を素材として明らかにする。さらに『僧正』に見られる、くり返し起こった出来事と、一回しか起こらなかったか、出来事の内容としてくり返し起こりようもなか

った出来事が混在するような語りを取り上げる。このような時間的混乱もまた人物の知覚を介した語りが可能にするものであると示すことによって、人物の全人生が過去と現在の合一したかたちで豊かなその全貌を示すのと同じその時点で彼の生が行き止まること、同時に未来に向かって進んでいく時間はそれと関わりなく存在することが明らかにされる。つまり、チャーホフの時空間にあっては、行き止まり、消え去る個体の「人生」と、くり返し孕みつねに未来を志向する自然の「生」と、二つの異なる流れが存在することが示される。そこで注目されるのは、人物が自然の内に「本当の生活」や「真理」を見出すという、いわゆる「抒情的逸脱」がチャーホフの詩学においてもつ意味である。従来、彼の抒情的逸脱は、自然に内在する美や真理に語り手＝作者が人物を触れさせるものと見なされてきた。だが本論は、上で述べたような「逃避」のモチーフとも重ねて、「今・ここ」にはない、彼らが欲するものを、人物の知覚が自然の内に描き出すものとしてそれを捉える。その結果、自然はダーウィニズムが明らかにしたように人間に対するはからいをもたないものとして、その内部は空虚なままに残されることになる。しかも人物から自然へ向けられたこのような目的論的なまなざしと、語りが自然をそのようなものとして語る非目的論的なまなざしの交換は、場面の中で一連のものとして示される。したがって、人間的な見方と俯瞰的な見方とに、チャーホフのまなざしは二重化していることが指摘できる。

以上の議論を踏まえて、結論では特に以下の点に注意を促す。人間的な見方と俯瞰的な視線の交差点としての人物を介して、浮かび上がるのは、時間と空間の現在のただ中において人物が世界を認識しようとする一瞬のあり様である。こうした認識への問いかけは、人間が有限の時と断片的空間に生きる以上、安易に答えが与えられる性質のものではない。そもそも、世界を非目的論的なものと捉えれば、それを明らかにすればすべてが解決されるような初源的なものなどありそうもない。しかしながら、遡求すべき「何か」が存在しないとしても、その空白がもたらす落胆が人間のものである限り、進化論が、その非目的論的な世界像がためにいつもわれわれの人間的感覚を刺激してやまないことにも似て、問いはくり返される。このように、二重化したまなざしの中で、人物が世界を認識し、世界に住まうその仕方を描く点にチャーホフの詩学の独自性があることを本論は結論する。つまり、本論は、チャーホフの人物造形、物語構造、そして時空間の性質を進化論の本性と平行に描き出すことによって、有限な人の生と自然の大きな生の間に埋め尽くせない空白をそのままに残すようなチャーホフの詩学を理解する際の手がかりを呈示するのである。